

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：35308

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24652177

研究課題名(和文) 国際結婚家族における文化伝承メカニズムに関する学際的研究：言語と宗教を中心に

研究課題名(英文) Interdisciplinary Studies of Cultural Inheritance Mechanism among Intermarried Families: Focusing on Language and Religion

研究代表者

新田 文輝(Nitta, Fumiteru)

吉備国際大学・社会科学部・教授

研究者番号：10268641

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本・インドネシア、日本・トルコ、そして日本・フィリピンの3タイプの国際家族での言語・宗教継承について調査した。言語継承では、3タイプの家族で複数の言語が家族で使用されているが、主要言語は共通的に日本語(居住地決定性)である。第2言語としては、インドネシア語、トルコ語、フィリピン語より英語の方が継承される傾向が判明した(英語の威信性)。

宗教継承に関しては、イスラム教、ヒンデュー教、カトリック教の順で継承意識に差あり、前者2宗教に関しては、日本での継承には様々な困難が伴うことも分かった。他方、カトリック教では、他の2宗教ほどフィリピン母親側に切迫した意識は見られなかった。

研究成果の概要(英文)：This study examined the inheritance issues of language and religion among intercultural families of Japanese-Indonesians, Japanese-Turkish, and Japanese-Philippines. Regarding the language inheritance, Japanese is the main language (Domicile determinant) among the 3 types of families. In addition, rather than Indonesian, Turkish, or Tagalog, English turned out to be the second language in the 3 types of families indicating the prestige and important factors of the English language.

As for the religion inheritance, there are differences in the felt needs depending on religion. Parents of Islam tend to feel the strongest need to bring their children up to be Muslims, followed by Hindus. Catholic parents did not seem to indoctrinate their children to be Catholic. Rather, among the Japanese-Philippines families, both elements of Catholicism and Buddhism & Shinto are celebrated (Eclectic Catholicism).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：国際結婚家族 言語継承 宗教継承 日比国際結婚家族 日インドネシア国際結婚家族 日トルコ国際結婚家族 国際児

1. 研究開始当初の背景

(1) 本共同研究を開始した当初、すでに鈴木一代・竹下修子両分担研究者は長年にわたり、それぞれインドネシア人・日本人およびトルコ人・日本人の国際家族の研究をしていた。

他方、新田は1980年代に、博士論文のための調査で「外国人妻の会」Association of Foreign Wives of Japanese (AFWJ)という組織を通じて調査研究をした経験があった。しかし、その後は国際結婚家族の調査研究はしていなかった。そこで上記のような経緯から、新田は本研究でも AFWJ 会員のうちからアメリカ人女性の協力を得る計画であった。

(2) ところが予想に反して、正規に AFWJ 本部に調査協力願いを提出したものの、1人の協力者も得ることが出来ず、初年度のほとんどは、実質的な調査をすることが出来なかった。

翌年になり、新田が以前から親交のあった、日本人男性と結婚しているフィリピン女性のグループに調査協力を依頼したところ、快諾が得られたので、2年度の1月から実地調査を開始した次第である。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、心理学(鈴木)、社会学(竹下)、そして文化人類学(新田)をそれぞれ専門とする3人の研究者が分担して、学際的な視点からインドネシア人(特にバリ人)・日本人、トルコ人・日本人、およびフィリピン人・日本人の3タイプの国際家族における言語と宗教の継承について調査するのがお主な目的である。

(2) 本研究における言語とは、インドネシア語・バリ語、トルコ語、およびフィリピン諸語である。フィリピン人母親の場合、国の公式言語はタガログ語と英語であるが、それ以外にビサヤ語など、出身地により他の言語も関連している。いずれにしても、上記の諸言語がどのように継承されているのか、されていないのかについて調査した。

(3) 宗教については、インドネシア・日本人家族はヒンデュー教(ここでは特にバリ・ヒンデュー教)、トルコ人・日本人家族はイスラム教、そしてフィリピン人・日本人家族はカトリック教の継承である。ここではまた、特に外国人親の継承意識、宗教を継承する上での社会・文化的な困難性に関して宗教間で差異はあるのかになどについて調査した。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、上述のように3人の研究者の専門分野がそれぞれ心理学、社会学、および文化人類学と異なるが、研究方法は、共通的に質的調査方法である。すなわち、聞き取り調査(面接・インタビュー)と参与観察を主に用いた。

(2) インタビューは、半構造的インタビューを主に用い、調査協力者の了承を得て録音し、後に文字化した。インタビュー調査の場所であるが、調査協力者の家庭をはじめ、カフェ、教会やモスクなどで行った。面接の時間は、全体的に1時間から2時間以上に及んだ。

(3) インタビューに加えて、3人の研究者とも参与観察を実施し、聞き取り調査だけでは得られない情報収集を行った。参与観察は、聞き取り調査のようにあらたまった状況で質問して、答えてもらうのではなく、よりリラックスした通常の日常生活で、調査協力者に意識されない、自然な状況で観察するものである。それには、教会やモスク以外に、集会やパーティーなどでも参与観察をした。また、調査協力者の家庭におけるインタビューも、彼らの生活環境を垣間みることのできる良い機会であった。

(4) 調査の際の使用言語については、複数の言葉が使用されていたが、共通的には日本語が主である。しかし状況や会話への参加者によっては、英語やインドネシア語も使用した。例えば、フィリピン人・日本人家族のインタビューでは、調査協力者がフィリピン人母親と調査者だけの場合は、主に英語であるが、そこへ子どもたちや日本人父親が加わると、日本語をも交えて会話が進む。同時に、会話の途中で、話しの内容によっては、英語から日本語へ、又日本語から英語へと流動的に変化することがしばしばであった。

4. 研究成果

(1) まず言語継承に関しては、予想どおり3つのタイプの国際家族においては、複数の言語が家族成員の間で使用されていた。しかしながら主要言語はあくまで3タイプ共通的に日本語であった。これを私たちは、言語の居住地決定性と呼んでいる。居住地決定性とは、いずれの場所(地域や国など)に住んでいようと、家族内で複数の言語を使用する国際結婚家族などにあっては、その居住地の言語が第1言語(優勢言語)になる傾向を指す。

(2) 次に第2言語としては、インドネシア語、トルコ語、フィリピン語など外国人親の母語が、国際児が幼少の時期に使用されるのが一般的である。しかし、彼らが中学生のころになると変化がおこる。すなわち、外国人親の母語よりも、英語の方が継承される傾向が強くなることが判明したのだ。ただし、フィリピン人・日本人家族の場合、公式言語にはタガログ語のほかに英語も含まれているので、この場合では英語自体もフィリピン人母親の母語継承と言えよう。

(3) 以上のことは、現代のグローバル社会における英語の威信性に加えて、その世界共通語としての有用性の現れであろう。いずれにしても結果として、調査家族の国際児の多くはバイリンガルになる可能性が高い。しかしバイリンガル能力といえども、これにはさまざまなレベル、グラデーションがあることが知られている。例えば、次の3タイプである：

2つの言語が均等に理解でき話せる均等バイリンガル（これはまれだとされる）

第1言語に加え、第2言語も聞いて理解でき話せる能動バイリンガル

第1言語に加え、第2言語は聞いて分かるが話せない受動バイリンガル

(4) 本研究で分かったことは、一様にして彼らは日本語を優勢言語とした受動バイリンガルであることだ。すなわち、国際児は、英語を含めた第2言語を聞いて理解出来るが、返事は日本であり、話せないのが一般的である。ただし、バイリンガル能力自体も流動的で、子ども成長や長期の旅行、居住地の移動（例えば日本から外国へ）などによりバイリンガル能力も変化する可能性がある。

(5) 宗教継承に関しては、イスラム教、カトリック教、ヒンデュー教の順で継承意識に差が見られた。またさまざまな理由から、イスラム教とヒンデュー教にあっては宗教継承が日本では困難が伴うことが分かった。他方、カトリック教では、他の2宗教ほどフィリッピン人母親側に切迫した継承意識は見られなかった。

(6) 戒律が厳しいとされるイスラム教にあっては、子どもたちをムスリム（イスラム教徒）に育て上げるのは、各家庭の責任だけでなくムスリムコミュニティにとっても重要な課題である。家族内に限っても、トルコ人父親が、ホワイトカラー層の場合は、直接子どもたちにクルアーン（コーラン）を教えることができる。しかし例えホワイトカラー層であっても、世俗主義の教育を受けていたら、クルアーンが読めるわけではない。またブルーカラー層の親にあっては、コミュニティのクルアーン教室に通わせることになる。

(7) イスラム教とカトリック教を比較した場合、特に大きな差異も見られた。前者にあっては、家庭での人的な資源でのイスラム教的教育が無理な場合は、クルアーン教室に通わせるなどして、社会的資源で補完され、イスラム教が継承されていた。

(8) 他方カトリック教では、フィリッピン人母親の中には、さほどカトリック教の継承にこだわらない人が目立った。宗教的な行事に関しても、家族によっては日本のお正月や彼岸のよ

うな神道や仏教の祝い事をする一方、クリスマスや復活祭をも祝っていた。

このように、カトリック教家族によっては、日本の宗教的行事の執行が見られた。これは、見方によればフィリッピン女性たちの日本社会・文化への適応のよさの現れと見ることができる。同時にそれは、相対的にイスラム教およびヒンデュー教と比較して、カトリック教の寛容性をも示していると解釈できよう。これを私たちは折衷的カトリシズムと呼ぶ。

(9) ヒンデュー教に関しては、日本在住バリ人の場合、宗教の継承は重要だが、困難なことが分かった。それは、バリ・ヒンデュー教がバリにおける儀式と結びついてあるからである（居住地にむすびついた宗教）。また、バリ・ヒンデュー教の特徴（緩やかな戒律、まとめて儀式を行う可能性など）から、日本（海外）においては、宗教継承の一時的保留という現象が見られた。

(10) 調査の限界

すでに上記研究開始当初の背景部分で述べた様に、本共同研究では、3人の研究分担者間でテーマに関する調査期間に差がある。すなわち、フィリッピン人・日本人家族を調査した新田の場合、調査期間は1年あまりであった。結果、調査協力家族連れは5家族である。また、インドネシア人・日本人国際家族の場合も4家族で、調査期間も約1年であった。

しかし、トルコ人・日本人家族の調査では20家族を5年以上にわたって調査したデータを含めた。調査方法が共通的に質的とはいえ、3タイプの国際家族を比較するには、数的にアンバランスであるかもしれない。

また、外国人親の性別に関しても、トルコ人とインドネシア人の場合は男性、フィリッピン人の場合は女性であった。このような違いは調査結果に何らかの影響があるかもしれない。

(11) 今後の課題

まず、本調査を続けて行くのに必要なことは、フィリッピン人・日本人およびインドネシア人・日本人国際家族の調査協力家族の数をより多く確保し、出来る限り3タイプの家族数がより平均的になるようにすることである。

また、可能であるなら、外国人親の性別を男性または女性に限定して、言語と宗教の継承を調査すれば、今回とは異なった発見があるかも知れない。

次に、面接は、母親に限らず出来る限り夫や国際児ら他の家族メンバーをも含めるべきであろう。相手が夫や子どもの場合、仕事や学校に行っていて、インタビューは困難かもしれないが、週末にアポイントを取る等して同家族の異なった成員からも情報を得られれば、また異なった視点や解釈が得られるかもしれない。

5 . 主な発表論文等

[学会発表](計2件)

(1) Fumiteru Nitta (chair) "Transmission of Language and Culture among Intercultural Families in Japan and Indonesia" at The 10th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology", 21-24 August 2013, Yogyakarta, Indonesia

(2) 鈴木一代 (代表) 国際結婚家庭 (国際家族) における日系国際児への言語と宗教の継承-その要因とメカニズム- 異文化間教育学会第35回大会、2014年6月8日、同志社女子大学

(3) Fumiteru Nitta (chair) "Transmission of Language and Religion among Intermarried Japanese Families: Cases involving Indonesians, Philippines, and Turkish" The 22nd International Congress IACCP 2014, Reims, France, 15-19 July 2014

6 . 研究組織

(1)研究代表者

新田 文輝 (NITTA Fumiteru)
吉備国際大学・社会学部・教授
研究者番号：10268641

(2)研究分担者

鈴木 一代 (SUZUKI Kazuyo)
埼玉学園大学・人間学部・教授
研究者番号：40261218

(3)研究分担者

竹下 修子 (TAKESHITA Shuko)
愛知学園大学・文学部・教授
研究者番号：60454360